まちづくり 実践^{レポー}ルから南から〜 次々始動するプロジェクトで 「アートのまちづくり」を 積極的に推進





八戸ポータルミュージアム内の「こどもはっち」は、就学前の子どもと大人の交流の場

「アートのまちづくり」を積極的に推進する青森県八戸市。そのまちづくりの核となる公共施設が2011年、中心市街地活性化を一つの目的にオープンした「八戸ポータルミュージアム」で、ここでは自主事業で様々なアートプロジェクトに取り組んでいる。「平成の大合併」で2004年に合併した南郷地区(旧・南郷村)では、過疎地域との一体感の醸成などを目的に2011年から「南郷アートプロジェクト」を開催。新産業都市に指定され工業都市として発展

した臨海部の工場群を地域資源ととらえ2013年に開学したのが「八戸工場大学」で、市民参加の様々なプロジェクトを実施する。2016年には、「八戸ポータルミュージアム」南隣の再開発ビルに全国でも珍しい公営書店「八戸ブックセンター」が開業。さらに2017年に閉館した旧八戸市美術館に代わる新美術館が2021年、市庁舎の前にオープンする。ラーニング(学び)を柱に据えた全く新しいタイプの美術館として整備を進めている。



八戸ポータルミュージアム・hacchi (はっち)

「アートのまちづくり」を担った まちづくり文化推進室の手法とは

八戸市は東北新幹線、八戸自動車道が通じる交通の要衝で県下最大の工業都市だ。農産物、水産物、観光資源にも恵まれ、「三八(さんぱち)」と呼ばれる青森県南東部地域の商業の中心でもある。人口は23万人。市では「アートのまちづくり」を積極的に推進している。コンセプトは「アートが持つ力で市民一人ひとりがまちづくりの主役として活躍する」で、小林眞市長が2005年に就任して「まちづくり文化推進室」が設置され、文化施策が本格的に動き出した。

「それまでは他の自治体と同じように美術館や博物館やホールの運営、文化財行政などを行っていましたが、『アートのまちづくり』という新たな観点で文化施策を進めることになったのは、その時からです」(八戸市まちづくり文化推進室室長・前田晃さん)

とはいえ、当時の市職員は施設のハードの部分ならともかく、文化施策のソフトの部分となると「アーティストを呼んできてまちづくりをするとは、いったい何をすればいいのか?」という根源的な部分から手探りで始めなければならなかったという。地域のアートプロジェクトでまちづくりを進める目的で、専門性がある人材を嘱託職員の形で新たに採用した。現在は正職員として同室文化推進グループ主事兼学芸員を務める大澤苑美さんは当時、アート関係の財団職員から転じ、嘱託職員の芸術環境創造専門員として八戸市に入職。「アートのまちづくり」のスタートアップから参加し、合併した南郷地区での「南郷アートプロジェクト」の企画も任された。

「アーティストとのネットワークは以前からありましたが、 展覧会などを見に行って『いいな』と思ったら会ったこと がなくてもオファーすることもあります」

アートプロジェクトは、地域資源を外部のアーティストと コーディネートすることで成り立つ。アーティストは、市民 が八戸の良いところ、面白いところを再発見するプロジェ クトの「協力者」という立ち位置。「大御所か若手かを問 わず、市民と共創することに理解があり、それを楽しんで くれる人の方が相性が良い」と、大澤さんは話す。

アーティスト人脈を持つコーディネーターや、プロジェクトの企画・運営のために事業ごとに必要になるディレクターは、外部の人材に任せることもある。それでも丸投げで任せるようなことはせず、どんなプロジェクトでも市職員が何らかの形で企画や運営に関わっている。



様々なイベントが開催されている南郷文化ホール

「アートのまちづくり」を担うまちづくり文化推進室には現在、約25名が所属し、中心市街地活性化のグループ、再開発関係のまちづくり支援グループ、文化推進グループ、八戸ブックセンターの4つに分かれる。文化推進グループはリーダーを含め5名で複数のプロジェクトを動かしている。生え抜きの市職員は、嘱託職員や協力企業、アーティストなどから文化施策のノウハウを吸収し、蓄積していくことで、内部でも人材が育った。

「アートの専門家やファンでなくても、アーティストと出会い一緒にイベントを実現させていく中で『アーティストの人たちにはこんな面白いところがあるのか』と発見したりして経験値が上がります。それが、職員も企画や運営に関わる当市のアートプロジェクトの良さではないでしょうか」(同室芸術環境創造専門員・高橋麻衣さん)

「継続してきたことでソフトパワーの部分で力がつきました。他の自治体でも一般の行政職員が文化施策の担当に 異動することがあると思いますが、その時にどのように取り 組んだらいいか、当市の事例は参考になるでしょう」(前田 さん)。文化施策のこの手法は他部署にも刺激になり、庁 内に好影響を及ぼしているという。

八戸ポータルミュージアム 「hacchi(はっち)」が果たす役割

中心市街地に建つ「八戸ポータルミュージアム・hacchi (はっち)」は、2011年2月11日にオープンした観光・文化交流を目的にする多目的施設。市民も観光客も「八戸を知る」ことができる交流と創造の拠点としてハード、ソフトを一体的にプランニングした。中心市街地にかつての賑わいを取り戻すために、まちづくりとその活性化に貢献している。

誰でも気軽に立ち寄ってコミュニケーションが生まれる「会所場(かいしょば)」づくりのほか、シアター、ギャラリー、多目的スペースなど「貸館事業」で市民の活動をサポートする。しかもスペースを貸すだけでなく、自らもアートプロジェクトを企画・運営して地域の文化を創造し、育む「自主事業」にも取り組んでいる。「はっち」は「アートのまちづくり」の出発点であり、ランドマークであり、その最大の拠点である。

自主事業には、①中心市街地賑わい創出事業、②文化芸術振興事業、③ものづくり振興事業、④観光振興・フィールドミュージアム推進事業の4つの柱がある。

1~4階の「はっち」館内の展示スペースでは八戸の郷



「なんごう小さな芸術祭」での南郷紅白大演会

土史や民俗文化だけでなく、市民の芸術作品や、美術、音楽、古典芸能、郷土料理などに取り組む市民の活動にも触れることができる。飲食や休憩のスペース、物販スペースも充実し、市民や観光客が自由に回遊して「まるごと八戸を感じられる施設」だ。「はっち」は八戸市まちづくり文化スポーツ部に所属し、コーディネーターはそれぞれの分野で地域の人々とアーティストとをつなぐ役割を果たしている。開設9年目で人脈的にも蓄積ができたが、施設運営や企画のアドバイサーでもある外部の「文化ディレクター」が持つ人脈も活用している。

八戸ポータルミュージアム館長の三浦順哉さんは「はっち」を「人が集まる、楽しくてワクワクする場所」だと紹介する。例えば4階の「こどもはっち」は就学前の子どもと大人の交流の場で、育児支援機能も備えた遊び場。木のぬくもりを感じながら、子どもも大人も笑顔があふれる楽しい時間を過ごせる。2014年には「文化芸術都市部門」で文化庁長官表彰を受けている。オープン1か月後に東日本大震災に見舞われたが来館者は年間90~100万人のペースで順調に伸び、2019年度中に累計800万人を突破する見込みだ。

「文化施策は成果指標が見えにくいと言われますが、当館はどれだけ多くの方が来てくださるかという数字が目に見えて、結果がわかりやすくなっています」と三浦さん。オープン前に比べ施設前の歩道の歩行者通行量は約2倍に、八戸市中心街の歩行者通行量は約25%伸び、中心市街地の賑わい復活でも結果を出している。三浦さんによると、徒歩5分の場所に2021年に完成する新美術館や市民公会堂などとの連携をどうするかが、今後の検討課題だという。

過疎地域にアートの花が咲く 「南郷アートプロジェクト」

15年前の2004年、「平成の大合併」で八戸市は南隣の南郷村と合併した。市街地や工業地帯、漁村など八戸市内の他地域と比べると南郷地区は山あいの過疎地で、まちづくりの上で他地域との一体感を醸成するにはどうすればよいかが課題で、合併特例債で建設した文化施設「南郷文化ホール」の活用も視野に入れる必要があった。そんな中、「アートのまちづくり」の一環として2011年、「南郷アートプロジェクト」が始動した。

人口約5,300人の南郷地区を主な舞台に地域住民と外部 のアーティストが交流。アートを通じて日常生活に従来とは 異なる新しい視点、面白い考え方、変わった方法が取り入



八戸工場大学の工場見学風景

れられる。それにより南郷地区では創造的な活動が自発的、 多発的に行われ、地域内外の人が様々な方法でそれに関 わりたくなるような魅力的な地域になっていく。それが南郷 アートプロジェクトが目指す目的だ。

当時からプロジェクトの立ち上げに関わっている大澤さんは、次のように話す。「『はっち』が2011年2月に開館しましたが、『アートのまちづくり』を前進させるには中心市街地活性化が主目的の『はっち』以外に、市の周辺部でも地域資源をアートと結びつけて活性化させようとしていました。職員やアドバイザーとアイデアを出し合って議論した中で、まず旧南郷村と工業地帯に焦点を当てて取り組むことになりました。旧南郷村では『南郷アートプロジェクト』、工業地帯では『八戸工場大学』です」。

南郷アートプロジェクトを担当するのはまちづくり文化推進室文化推進グループと、南郷文化ホール所属の職員。まだ南郷村だった1990年から村おこし目的で夏に野外ジャズフェスティバルを開催している実績から、初年度はジャズと、コンテンポラリーダンスを組み合わせた野外パレードやホール公演を開催した。その後は毎年、ダンスを中心にアートプロジェクトの様々なイベントが組まれ、2018年10月~11月、8年目の集大成として「なんごう小さな芸術祭」が開催された。

「市民だけでなく遠方からも見に来てほしいので、『この期間に南郷に来ればいろいろ見られます』と広くアピールできる総合イベントを企画しました」(高橋さん)

芸術祭は、捕鯨漁従事者を輩出した郷土の歴史に着目した演劇公演、民俗芸能えんぶりに独自の解釈を加えた舞踏公演、住民から聞き集めた物語を描いたカルタの原画、地域の草花を素材に参加者と制作した染色作品、地元在住作家の現代アートといった美術作品の展示のほか、南郷とアートをめぐるバスツアー、ワークショップやライブ、トークイベントなど、内容は盛りだくさん。

「南郷紅白大演会」は民俗芸能、ジャズ、民謡、カラオケなどの地域の芸達者とダンサーが紅白に分かれて行う演芸ショーで、来場者は大いに楽しんだ。「すまもり村の収穫ショー」は南郷地区の地域行事でジャズバンドやダンサーがパフォーマンスを披露した。現代美術家が民家で地域の食をふるまう「南郷のおうち」も行われた。

「ダンスのアーティストに地元の郷土芸能を習っていただくと、その身振りやお話から刺激を受けて新しい作品が創作されたということもありました。私たちはアートのそんな出会いの場を提供して、お手伝いしています」(大澤さん)



「本のまち八戸」の推進拠点「八戸ブックセンター」

時にはアーティストだけでなく、写真家やデザイナーなどのクリエイターもプロジェクトに関わってきたが、それぞれが地域との交流で新たな創造のインスピレーションを受けて帰っていった。2019年の南郷アートプロジェクトは、住民参加型のダンス映画製作を計画している。

「工場萌え」だけではない「八戸工場大学」の取組み

八戸市は1964年に「新産業都市」に指定され、八戸港 周辺の埋立地に非鉄金属、化学、セメントなど様々な工場 や火力発電所が建って工業都市として発展。1972年には八 戸工業大学も開校した。地域資源を活かした「アートのまち づくり」の当初の構想の一つとして「八戸工場大学」が浮 上したが、東日本大震災の発生もあり各工場が復興するの を待ち、2013年に"開学"した。事務局はまちづくり文化推 進室文化推進グループに市民有志が加わって運営している。

立ち上げ前から工場に「美」を見出した写真集が売れるなど「工場萌え」が話題になっていたが、活動はただの工場萌え、産業観光にとどまらない。市の発展を支えた臨海部の工場群を地域の「宝」ととらえ、その魅力や価値を再発見し、発信するプロジェクトとした。工場を景観、まちづくり、観光、文化、産業など多角的な視点でとらえ、アートで新しい視座と気づきをもたらす存在と位置づける。八戸工場大学の"建学の理念"は「八戸は、工場のまち。工場が元気であること、工場のまちとして誇れること。それは八戸の力です」。東日本大震災直後には工場の操業の再開が市民を勇気づけ、日常が戻る復興のシンボルのようになっていた。

文化的視点から工場を知り、八戸の「工場力」を知るための講義やワークショップをはじめ、課外活動、工場と連携して実施するアートプロジェクトを指すサークル活動が活動の三本柱。2018年1月には工場をモチーフにした視覚表現の展覧会を開催した。同年8月には、工業地帯のシンボルだった八戸火力発電所3号機の大煙突の解体を前に、東北電力の特別協力を受けて発電所見学会とトークイベントを組み合わせた「さよなら、ぼくらの大煙突」を開催。夜には参加者がエアロバイクの「自転車発電」で起こした電気で大煙突をライトアップするというアートイベントを成功させている。また「はっち」にも工場写真のコーナーが設けられた。

「もともと見学を受け入れない工場もあり、消極的だった 企業も、今では『うちの工場を理解してもらういい機会』 と講師を派遣してくださるなど協力的」と大澤さん。



八戸ブックセンターの「読書会ルーム」

工場好きの市民、企業、行政、アーティストが連携したユニークさが評価され、日本文化の魅力を発信しレガシーを創出するための文化プログラム「beyond2020」の認証事業となり、2018年度の文化芸術創造拠点形成事業として文化庁の助成も受けている。同年3月には一般社団法人地域活性化センターが主催する第22回「ふるさとイベント大賞」の「ふるさとキラリ賞」を受賞した。

公営書店「八戸ブックセンター」は 「本のまち八戸」の推進拠点

「アートのまちづくり」を進める市では、文化施策として「本のまち八戸」も推進している。これは小林眞市長の3期目の政策公約でもあり、その目玉的な存在が2016年に開店した全国でも珍しい公営新刊書店「八戸ブックセンター」だ。中心市街地の「はっち」のメインストリートをはさんだ南側に建てられた民間ビルの1階にあり、面積は約315㎡。毎週火曜を除く毎日、午前10時から午後8時まで営業している。

きっかけは、市長が誘致企業のトップから聞いた「八戸にはいい書店がない」という言葉だったという。本の販売を公共サービスとして提供する施設コンセプトは、八戸に「本好き」を増やし、八戸を「本のまち」にするための新しい「本のある暮らしの拠点」をつくること。本棚に本が並び、自由に手にとって立ち読みし、気に入ればレジで購入できる点は民間の書店と同じだが、品揃え、様々なコーナー、イベントなどで、本がもっと好きになれるユニークな工夫が凝らされている。3つの基本方針は、①本を「読む人」を増やす、

②本を「書く人」を増やす、③本で「まち」を盛り上げる。

本棚「セレクトブックストア」は、「自然」「人文」「芸術」「世界」「どう生きるか」「仕事のはなし」などテーマごとに、専門性は高くないが、新たな知の世界へいざなう基本図書、売れ筋ではないが良い本を選んで"編集"した「編集型」「提案型」陳列を展開。八戸に関連した「フェア棚・ひと棚」もあるが、基本的にコミック本や雑誌は置いていない。

ハンモックを吊した閲覧場所もあり、ゆっくり本を読んで選べる。購入カウンター横にはカフェも併設され、ドリンクを飲みながら読書が楽しめる。市出身の芥川賞作家、三浦哲郎氏の文机のレプリカ(読書席)、各種展示を行うギャラリー、本を書きたい人は執筆場所に使える「カンヅメブース」があり、「読書会ルーム」ではブックセンターや市民が企画した読書会を開催。トークイベント、ブック・ドリンクス(本について語らう交流会)、歴史好きのためのヒストリーカフェ、自



2021年に開館予定の新美術館

費出版のワークショップなどのイベントも積極的に行っている。 特徴的なのが八戸市内の市立図書館、民間の書店、市 民活動との連携だ。"民業圧迫"にならないよう棲み分けを 図っている。例えば、本の取り寄せ注文は受け付けず民間 の書店を案内する。書棚の商品構成も市内の書店をリサー チして重複しないようにしている。セレクトは職員の仕事だ が、発注、検品、陳列、受付、レジなどの仕事は、市内の 書店3軒が共同で設立した会社に委託し、官民の共存共 栄を図っている。

「市立図書館で本を借りるのと、買って本を所有するのとでは、やはり違います。書店の棚で一生を左右するような本と偶然の出会いを果たすこともあるはずです」(前田さん)。施設運営・管理、選書・陳列、イベント・展示など企画全般にわたって内沼晋太郎氏をディレクターに起用。内沼氏は2012年に東京・下北沢にビールが飲めて毎日イベントを開催する書店「B&B」を開店させるなど、本にまつわる様々なプロジェクトの企画、ディレクションに関わっている。

八戸市の「本のまち八戸」は、第6次八戸市総合計画 (2016年度~2020年度) のまちづくり戦略「人づくり戦略-教育プロジェクト」の中に位置づけられている。本好き市民を一人でも増やすことは人づくり、まちづくりにつながるという考え方である。

2014年度に始まった「八戸市ブックスタート事業」は赤ちゃんの股関節脱臼検診終了後、絵本の読み聞かせを行った後、絵本1冊と図書館の利用案内などを渡す。2016年度に始まった「"読み聞かせ"キッズブック事業」は、3歳児の保護者にキッズ・ブッククーポンを配布し、保護者が読み聞かせをすることで子どもが本に親しむきっかけづくりを図る。2014年度から始まった「マイブック推進事業」は、市内の小学校児童に、市内の書店で本を購入できるマイブッククーポンを配布し、子どもが書店に出かけて本を買い、読書に親しめる環境を提供している。中高生以上の年齢層に対しては八戸ブックセンターが市民を本好きにする役割を担い、切れ目はない。

意外にもこの店は「帰省客」「出張族」の間で好評だといい、全国的にネット書店の影響で街の書店が次々と閉店する中、八戸市の公営書店は健闘している。

市民のラーニング(学び)を柱とする 新美術館は2021年オープン

八戸市には、市庁舎前にあった旧八戸税務署の建物の



左から、八戸ポータルミュージアムの三浦順哉館長、八戸市まちづくり文化推進室の高橋麻衣専門員、大澤苑美主事兼学芸員、 前田晃室長

払下げを受け、改修して1986年に開館した市美術館があったが、建物の老朽化などに伴い2017年4月に閉館した。2016年9月に「八戸市新美術館整備基本計画」が策定され、旧美術館や銀行などその周辺の建物を解体・移転させた跡に新美術館を建設するプロジェクトが動き出した。総工費約30億円をかけて2021年に開館する予定だ。

新美術館のビジョンは「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館〜出会いと学びのアートファーム〜」で、「美術館学芸」「アートの学び」「アートのまちづくり」という3つの役割を担う。美術品をただ鑑賞するだけでなく、アートを通じた「ラーニング(学び)」に重点を置き、それを事業の柱に据える斬新な基本コンセプトを掲げている。

「ふつうの美術館は作品の収集、保存、展示、研究が基本で『見せる』のが主ですが、新美術館は市民との関わり、地域資源を大事にする当市の路線の延長線上にあることを施設でも企画でも強く打ち出していきます。人の活動が見える美術館、人に使われる美術館を目指します」(高橋さん)

「学び」と言っても、八戸市の文化施策にはもともと市 民に教育や教養を授ける、啓発するといった空気は薄い。 一方的に教えるのではなく、市民が自分からアートを学び、 感じ、発見し、考え、この地域が好きになる、活動に参加 したくなるような環境を用意するという姿勢に徹している。

新美術館の入場者は、作品を見てその背景を知るだけでなく、アートとの出会いを通じて人と話し、自分で考え、場合によっては自分でも創作に参加しようと思い立つ。そうした「アートを通じて生まれる行為」が、自由な精神、創造的な発想、考える力、表現する力、異なる視点、新たな価値観を育み、それが明日の地域をつくっていく。「アートの学び」の連鎖反応が良き市民を育て、まちづくりに好影響をもたらすことを期待している。

例えば、新美術館中央部には「ジャイアントルーム」という多目的な大空間があり、他の入場者、学芸員など美術館スタッフ、アーティスト、ワークショップの参加者など人と人とが出会って、奥の展示室を見てきた感想などを話し、アートに関する情報を交換できる"広場"になると想定されている。そんな発想は、従来の公共美術館にはほとんどなかった。市民との関わりを重視するという斬新なコンセプトの新美術館の整備は、八戸市の「アートのまちづくり」の総仕上げのようなプロジェクトである。